

王都のうた

中国の名詩 6

天に在りては 願わくは

比翼の鳥と為り

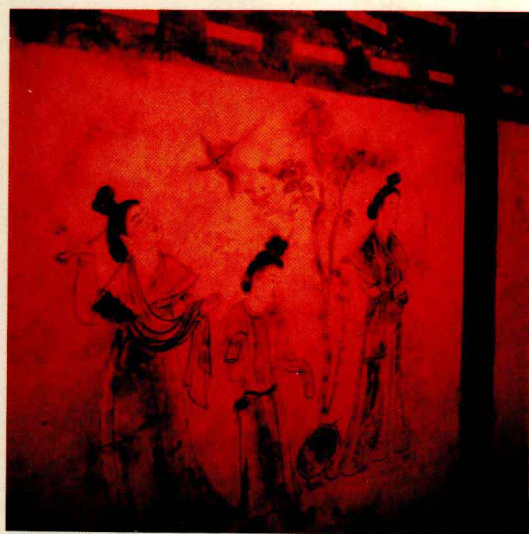
地に在りては 願わくは

連理の枝と為らん —白居易

銀鞍白馬の貴公子や胡姬が行きかう

世界帝国大唐の都の春をうたい

またはるか西のかた流砂のはて



唐詩 I

前野直彬 訳

前野直彬 訳

平凡社

中国の名詩 6

土都のうた

唐詩
I

中国の名詩 6 王都のうた 唐詩 I

定価 一、四〇〇円

発行日 一九八三年 一月一〇日 初版第一刷

訳者 前野直彬（まえの・なおあき）

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

〒一〇二 東京都千代田区三番町五番地

電話・東京〇三二六五―〇四五―（代表）

振替・東京八一二九六三九

印刷 東洋印刷株式会社／株式会社東京印書館

製本 株式会社石津製本所

不良本は小社読者サービス係でお取替え致します（送料小社負担）

目次

飲み屋の中で（過酒家） 王績 おうせき 2

軍中にて先に内地へと帰る友人に贈る（在軍中贈先還知己） 駱賓王 らくひんのう 4

春の日 都で抱いた感懷（春日京中有懷） 杜審言 としんげん 8

白頭を悲しむ老翁の歌になぞらえて（代悲白頭翁） 劉希夷 りゅうきい 12

七盤嶺に泊った夜（夜宿七盤嶺） 沈佺期 しんせんき 18

寒食の日 陸渾の別荘に帰る（寒食還陸渾別業） 宋之問 そうしもん 20

弟の之望へ 留別（留別之望舍弟） 宋之問 そうしもん 23

薊丘の古跡を訪れ盧藏用居士に贈る

（薊丘覽古贈盧居士藏用（燕昭王）） 陳子昂 ちんすごう 26

幽州の夜宴（幽州夜飲） 張說 ちやうえつ 30

感遇（感遇） 張九齡 ちやうきゆうれい 34

涼州詞（涼州詞） 王翰 おうかん 38

鶴雀楼に登る（登鶴雀樓） 王之涣 40

涼州詞（涼州詞） 王之涣 42

上京の途中 雪にあう（赴京途中遇雪） 孟浩然 44

春宮の歌（春宮曲） 王昌齡 46

命を帯びて辺塞に至る（使至塞上） 王維 48

安西へと出張する元二を送る（送元二使安西） 王維 51

輞川に帰って（歸輞川作） 王維 53

香積寺をたずねて（過香積寺） 王維 56

鹿柴（鹿柴） 王維 58

使者として清夷軍におもむき 居庸関に入る（使清夷軍入居庸） 高適 60

塞下の曲（塞下曲） 常建 62

胡笳の歌 顔真卿が河隴へと出張するのを送る

（胡笳歌送顔真卿使赴河隴） 岑參 64

涼州の館で判官たちと夜宴のうちに（涼州館中與諸判官夜集） 岑參 68

砂漠さばくの中で（磧中作） 岑参しんじん 71

春の怨うらみ（春怨） 金昌緒きんしやうしよ 74

行く春を送る（送春） 楊衡やうこう 76

古挽歌こばんか（古挽歌） 孟雲卿もううんけい 80

夕方 盤屋ちゆうちつに着き 故老の家をたずねて（晚到盤屋耆老家） 盧倫ろりん 84

夜 受降城じゆこうに上り 笛の音を聞いて（夜上受降城聞笛） 李益りえき 88

杏殤きやうしやう（杏殤） 孟郊もうこう 90

宮詞（宮詞） 王建おうけん 92

春の歌（春詞） 王建おうけん 94

左遷されて藍関らんかんまで来たとき 甥おいの子の湘しやうに示す

（左遷至藍關示姪孫湘） 韓愈かんゆ 96

秋の思い（秋思） 張籍ちやうせき 100

歌手の何戯かかんにあたえる（與歌者何戯） 劉禹錫りゆうしやく 102

炭売りの老人（賣炭翁） 白居易はくきよい 104

長恨歌（長恨歌） 白居易 109

八月十五日之夜 ひとり禁裡で宿直をとめ 月に向つて元稹を思ふ

（八月十五日夜禁中獨直對月憶元九） 白居易 131

夜雨（夜雨） 白居易 134

趙村の杏の花を見に来て（遊趙村杏花） 白居易 136

雪を運ぶ車（雪車） 劉叉 138

正月の晦日に貧乏神を送る（晦日送窮） 姚合 146

江上にある呉処士を思ふ（憶江上吳處士） 賈島 148

桑乾河を渡る（渡桑乾） 賈島 152

連昌宮の歌（連昌宮詞） 元稹 154

三たび悲しみを晴らすために（三遣悲懷） 元稹 171

除夜（除夜） 盧仝 174

雁門太守行（雁門太守行） 李賀 176

感諷（感諷） 李賀 179

南山田中行（南山田中行） 李賀^{りが} 182

神弦曲（神弦曲） 李賀^{りが} 184

秋になつて（秋來） 李賀^{りが} 187

金銅の仙人が漢を別れる歌（金銅仙人辭漢歌） 李賀^{りが} 190

長安の春日（長安春日） 薛逢^{せつぽう} 194

暮春 澹水の岸に人を送つて（暮春澹水送別） 韓琮^{かんそう} 196

杏の花（杏花） 温庭筠^{おんていじん} 198

商山の朝発ち（商山早行） 温庭筠^{おんていじん} 200

楽遊原（樂遊原） 李商隱^{りしやういん} 204

長安の秋の眺め（長安秋望） 趙嘏^{ちやうか} 206

華清宮（華清宮） 崔櫓^{さいろ} 210

丙辰の年 鄜州で寒食を迎え 城外で酔いながらうたう

（丙辰年鄜州遇寒食城外醉吟） 韋莊^{いそう} 212

咸通のころ（咸通） 韋莊^{いそう} 214

河湟の老兵（河湟舊卒）
張喬 218

中年（中年）
鄭谷 220

詩人略伝 223

解説 235

装幀／山崎登

カバー写真・永泰公主墓壁画／富山治夫

口絵写真・楽人を乗せた駱駝／文物出版社・中国歴史博物館蔵

口絵写真・陽関古城／富山治夫

口絵写真・銀鍍金禽獸文脚杯／大阪市立美術館・白鶴美術館蔵

王都のうた

前野直彬
訳

飲み屋の中で

洛陽らくようには居い候そうろうできるお屋敷もなく
長安には世話してくれる人も少ない
いくら金を使ってもまだ足りないのは
おやじ お前の店のために貧乏しているのだよ

王おう
績せき

過酒家

酒家に過るよぎ

洛陽無大宅

洛陽らくように大宅無く

長安乏主人

長安に主人とぼ乏し

黃金銷未盡

黃金つか銷えども未だ尽さざるは

祇爲酒家貧

祇ただ酒家の為に貧なればなり

五首のうちの第一首。

軍中にて先に内地へと帰る友人に贈る

駱賓王

ころがる蓬よもぎのように　そろって国を離れた身だが
交代の時期が来ても私だけはまだ帰れない
都への道に心のみ迷い

見はるかす目のとどく限りは玉門関

凱歌がいの数では霍去病かくきよへいに及びもつかず

論功行賞ではどうやら班超はんちようにかぶとをぬごう

風塵ふうじんはわが髪に白いものを増し

歲月にわが頬ほの紅くれないは褪あせて行く

ねぐらにつく雁かりは秋の塞とりでに低く舞い下りて

目をさました鴨かもは夕闇ゆうやみの入江から飛び立った

胡地^この霜は劍^{つるぎ}の刃のように鋭く

故国の空の月は刀の柄^{つか}のように丸い

別れてのち 軍營の木の枝に

君をしのびつつ私は幾度手をかけることであらうか

在軍中贈先還知己

軍中に在^ありて先に還^{かえ}る知己に贈る

蓬轉俱行役

蓬^{はう}轉^{てん}俱^{とも}に役^{えき}に行き

瓜時獨未還

瓜^か時^じ獨^{ひとり}未^{まだ}還^{かえ}らず

魂迷金闕路

魂^{たま}は迷^{まよ}う金^{きん}闕^{けつ}の路

望斷玉門關

望^{もち}みは斷^きゆ玉^{ぎよく}門^{もん}關^{かん}

獻凱多慙霍

凱^{かい}を獻^{けん}ずるは多^{おほ}く霍^{かく}に慙^はじ

論封幾謝班

封^{ほう}を論^{ろん}ずるは幾^{いく}んど班^{はん}に謝^{しゃ}す

風塵催白首

風塵 白首を催し

歲月損紅顏

歲月 紅顏を損ず

落雁低秋塞

落雁 秋塞に低く
らくがん しゅうさい

驚鳧起暝灣

驚鳧 暝灣より起る
きょうふ めいわん

胡霜如劍鏢

胡霜 劍鏢の如く
こそう けんぎょう

漢月似刀環

漢月 刀環に似たり

別後邊庭樹

別後邊庭の樹

相思幾度攀

相思して幾度か攀じん

辺地の軍營におそらく文官として勤務中の作であろうが、作者が従軍した事情は明らかでない。

○蓬軒 北方の荒地に生える蓬は秋になって枯れると丸く収縮し、根が切れ、風に吹かれてどこまでもころがって行く。これを軒蓬・飛蓬などといい、行方さだめぬ旅ぐらしの人にたとえる。

○玉門関 今の甘肅省敦煌の西方にあった関所で、ここから西へ出れば完全に西域の地方となる。○霍 霍去病。漢の武帝のときの名将。匈奴討伐のために六度出撃し、いずれも大きな戦

果をあげた。○班 班超。後漢の名将。西域の諸国を攻め取り、定遠侯に封ぜられた。○刀

環 柄のところが環状をなしている刀があった。ここでは満月をその環になぞらえているのであ

るが、「環」はまた「還」にも通じるので、還^{かえ}りたいという心をもあらわす。『漢書』李陵伝に、漢の使者が匈奴に降服した李陵のところへ来て刀の環をさすり、「還れ」という合図とした話が見える。○攀 木の枝に手をかけるのは遠く離れた人进行うときの姿勢として、詩によくうたわれる。

春の日 都で抱いた感懷

杜
審
言

今年の身を寄せる地にわざわざ都を選んでしまった
愁えつつ見る春は春の名に値しないのに
上林苑のうちでは花だけがむなしく開き
細柳宮の前には柳の若葉がいたずらに青い
南橋のたもとでは行楽の貴公子たちが興を尽していよう
西の邸には將軍がどれほど客を招いたことか
洛陽の風光に向って私は言いたい
来年の春色こそは私に返してくれと